室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

「マクベス」地誌考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3337

「マクベス」地誌考

竹内　豊

Shakespeare's Place-Names Commentary *Macbeth*

Yutaka Takeuchi

Abstract

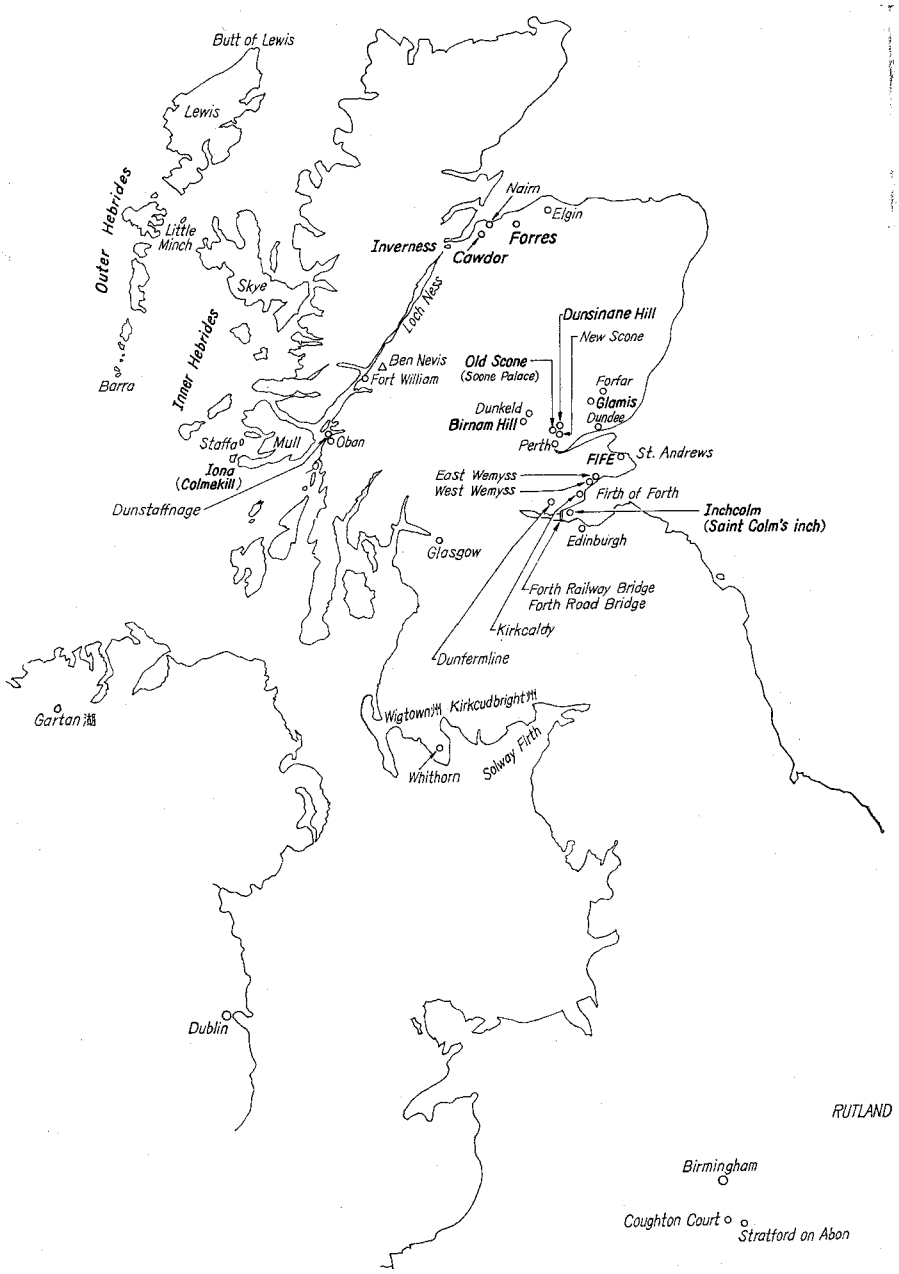
This commentary is designed to treat the names of places in Shakespeare's plays. Although the names of places are formally noted in many editions, they are summarily dismissed—usually in a line. The names of places stand in the background of the natural environment, and they are closely related with history of man.

This commentary is attempted in the belief that knowledge of the names of places is an important step for understanding human works in many fields—especially in literature.

The text used in the preparation of this commentary is that of the *Arden Shakespeare.*

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
Creeps in this petty pace from day to day,
To the last syllable of recorded time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!
Life's but a walking shadow; a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing. (*Macbeth* V. v. 19–28)

土地あるところ，必ずや人住み，歴史を生むであろう。その歴史とは哲学であり，文学であり，宗教であり，美術，音楽である。そうしてしかも人は風土あるところ，その風土の人であり，それが文学であれば，「イギリスの文学」となり，「ドイツの文学」となる。その伝で，それは「シェイクスピ


Butt of Lewis
Lewis
Outer Hebrides
Little Minch
Skye
Inner Hebrides
Barra
Nairn
Elgin
Forres
Inverness
Cawdor
Loch Ness
Dunsinane Hill
New Scone
Ben Nevis
Fort William
Old Scone
(Scone Palace)
Forfar
Glamis
Dunkeld
Birnam Hill
Dundee
Perth
FIFE
St. Andrews
Staffa
Mull
Oban
Iona
(Colmekill)
Dunstaffnage
East Wemyss
West Wemyss
Firth of Forth
Inchcolm
(Saint Colm's inch)
Edinburgh
Glasgow
Forth Railway Bridge
Forth Road Bridge
Kirkcaldy
Dunfermline
Gartan湖
Wigtown州
Kirkcudbright州
Whithorn
Solway Firth
Dublin
RUTLAND
Birmingham
Coughton Court
Stratford on Abon

アの文学」となり，「ゲーテの文学」となる。更にそれはシェイクスピアの「ハムレット」となり，ゲーテの「ファウスト」となる。その自然の背景と人間と歴史と不離の関係にあるものに地名がある。しかしながら地名は文学作品においてもその関心が人名に比してその度合が薄い。シェイクスピアの作品においても各種のテキストの注は余りに簡単で，なかには言及していないものもある。これは彼等イギリス人にとっては自明だからというものではない（われわれが自国の地名について必ず自明とは限らない）。シェイクスピアの舞台はイギリス本土はもとより隣接諸国から遠くはアジアと広範囲であり，またその自然の背景が重要な要素となっているものが多い。

地名の理解は，畢竟史的背景や他の文学作品との関連も知ることとなり，文学研究の一支柱と思われる。

昭和44年夏の「シェイクスピア・ツア」で訪れたシェイクスピアゆかりの地は筆者に強烈な印象を与えた。本考はそれが一つの契機となって生まれた。

シェイクスピアには37篇の劇があり，そのなかに出る地名について逐次コメントをつけてゆく予定であるが，本篇はそのうちの *Macbeth* 篇である。作品読解の便宜も合わせて，コメントは作品毎とし，更に，その地名の記載の順序も劇の進行を追った。見出し語の地名の後に付した数字は，それがテキストの最初に出た個所の行数を示したものである。そしてそれは *the Arden Shakespeare* によった。

尚，イングランドとかロシアなどの名についてはその説明を省いた。

1. the western isles　I. ii. 12

現在のヘブリディーズ諸島 Hebrides である*。ヘブリディーズ諸島はスコットランドの西海域大西洋上に浮かび（N 55.35–58.30　W 5.26–8.40），総数で500以上の島嶼からなる群島である。群島は小ミンチ Little Minch を以っ

* この諸島はプリニイ Gaius Plinius Secundus (23–79, ローマの博物学者) やトレエーミイ Claudius Ptolemaeus (fl. 127–151, アレキサンドリアの数学者，地理学者，天文学者) たちは既に Hebudæ または Hedudes として知っていた。

てスコットランド本土に近い方を「内ヘブリディーズ」Inner Hebrides（マル島 Mull その他），遠くを「外ヘブリディーズ」Outer Hebrides（群島最大の島ルイス Lewis その他）とに両分する。島の全長は「外ヘブリディーズ」の最南端バラ島 Barra から北端のバット Butt of Lewis までは約 208 km にも及び，島の幅も 1.6 km のものから 48 km のものとさまざまである。群島の殆んどが片麻岩 Gneiss からなるために 'Gneiss Islands' とも称され，山勝ちの地形で標高 800 m に達する山もある。こういった地質に加えて湿地も多く，また氷食による狭長な湖沼や峡湾など，また偏西強風で霧の発生多く，冷涼という気候のため住民の生計は漁業，特にニシン[注1]と牧畜，特にヒツジ，ウシに依存されている。ルイス島の南部地方で生産されるハリス Harris と呼ばれる手織のツイードが有名である。これはツイード Tweed の伝統的紡毛織物であり，手づくりの野趣豊かな味わいのある厚手のウール地である。9 世紀頃からノルウエー王に隷属し，14 世紀頃に至りスコットランド王の治下に入ったが，794 年にはスカンジナビア人の侵略を早くもうけたといわれ，それが故に群島の多くにヴァイキング時代の名残りが今は廃墟となって，天然の美しい洞窟などと共に現在観光資源となっている。洞窟のなかで最も美しいのが，この地方に 3 世紀頃いたという伝説上のケルトの英雄フィンガル Fingal の名をとり，フィンガルの洞窟 Fingal's Cave というが，これはスタッファ島 Staffa にあり，古ノルウエー語で 'the island of pillars' の意で，1772 年までは知られなかった海鳥とアザラシの生棲地であった。この洞窟は長さ 227 ft，幅 42 ft で干満以外の普通の潮位の時で水面から 66 ft ある六角形の玄武岩からなる大巌窟である。この大巌窟はメンデルスゾーン[注2]が 20 歳の 1829 年 5 月，第一回のイギリス訪問の際にここを旅して楽想を得て出来た序曲「フィンガルの洞窟」*Fingals Höhle* (*Die Hebriden*) で更に有名となっている。曲はこの孤島の美しくて淋しい風景をよくあらわし，大作曲家ワーグナー Wilhelm Richard Wagner (1813–1883) をしてメンデルスゾーンは第一流の風景画家であるといわしめたという。

2. Golgotha I. ii. 41

エルサレム市にある。エルサレム Jerusalem はパレスチナ Palestine (もと Holy Landとも呼ばれ，聖書でいう Cannan の地) の古首府で，現在は旧市街がヨルダン王国，新市街がイスラエル共和国に二分されている。キリスト教徒，ユダヤ人，回教徒などの巡礼の聖地であり，とくにキリストの生涯に最も密接な関係をもち，またその最後の舞台ともなったところである。更に7世紀頃マホメット Mohammed (570?–632) がここから昇天したという伝説により，イスラム教の世界においてもメッカ Mecca (マホメットの生地でサウディ・アラビア西部，ヘジャズ Hijaz の首都でイスラム教第一の聖都)，メデイナ Medina (マホメットとその後継者たちの墓所をもつイスラム教第二の聖都。サウディ・アラビア西部ヘジャズの都市) につぐ第三の聖都になるなど一つの都市に三つの宗教の聖跡が入りまじっている。特にエルサレムをめぐってのユダヤ教徒とイスラム教徒との対立は根強く，そのため現在ヨルダン王国側になった聖書に由緒ある殆んどの聖跡にユダヤ教徒やキリスト教徒の出入は困難となっている。エルサレムの名称の意義はヘブライ語での意「平和の基」(foundation of peace) とされている。ヘブライ語，アッシリヤ碑文，シリヤ語などが表わすエルサレムの語の語頭がすべて「町」の意で，その語尾が平和の神の名を表わすと説明されている。

Golgotha はヘブライ語の gulgóleth，またはアラブ語の gulgūltá に由来する語で「頭蓋骨」の意味である。エルサレム市外にあった刑場でキリストが磔刑にされたところであるが，その場所の地形から「頭蓋骨」のこの名がつけられたとされ，次の三つの福音書にその名が出ている。

(1) [32]その出づる時，シモンといふクレネ人にあひしかば，強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。[33]かくてゴルゴタといふ処，即ち髑髏の地にいたり And when they were come unto a place called Gŏl′gō-thȧ, that is to say, a place of a skull, [34]苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに，嘗めて，飲まんとし給はず。(マタイ伝福音書第27章33節)

(2) [20]かく嘲弄してのち，紫色の衣を剝ぎ，故の衣を着せ，十字架につけんとて曳き出せり。[21]時にアレキサンデルとルポスとの父シモンといふクレネ人，田舎より来りて通りかかりしに，強ひてイエスの十字架を負はせ，[22]イエスをゴルゴタ，釈けば髑髏といふ処に連れ往けり。And they bring him unto the place Gŏl′gō-thȧ, which is, being interpreted, The place of a skull. [23]かくて没薬を混ぜたる葡萄酒を与へたれど，受け給はず。(マルコ伝福音書第15章22節)

(3) 彼らイエスを受取りたれば，[17]イエス己に十字架を負ひて，髑髏(ヘブル語にてゴルゴタ)といふ処に出でゆき給ふ。And he bearing his cross went forth into a place called *the place* of a skull, which is called in the Hebrew Gŏl′gō-thȧ: (ヨハネ伝福音書第19章17節)

「頭蓋骨」を意味する英語は 'calvary' としてルカ伝第23章33節に出る。これはこの場所をギリシャ語がその同意語である *κρανίον* を当てたことから，そのラテン語訳が calvaria となり，そこから英語の calvary となったものである。

(ギリシャ語訳) *Καὶ ὅτε ἦλθον ἐπὶ τὸν τόπον τὸν καλούμενον Κρανίον,…*.

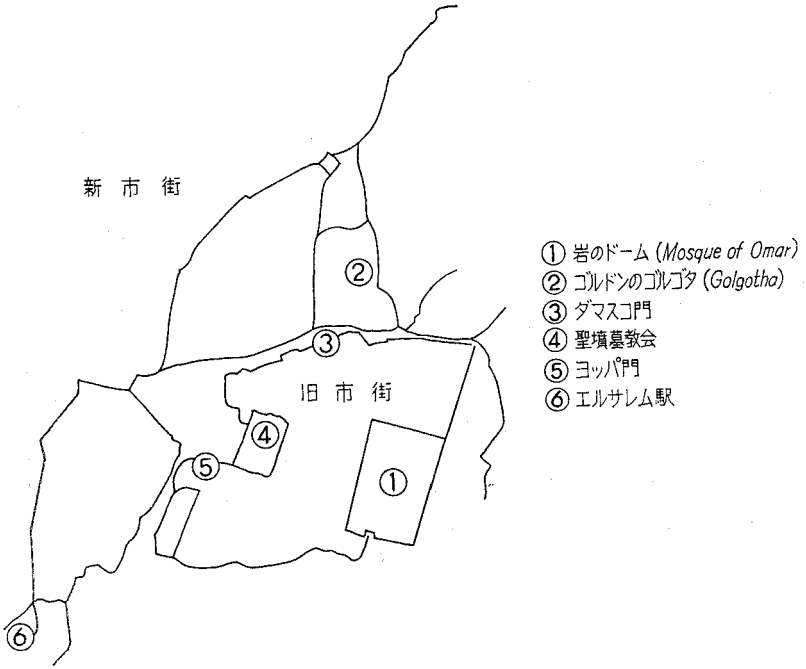
(ラテン語訳) Et postquam uenerunt in locum qui uocatur Caluaria,….

(英語訳) And when they were come to the place, which is called Calvary,….

しかし英語聖書でもこの calvary を使っているのは A. V だけで他はそれを使わず，ただその意をつけて skull としている。And when they came unto the place which is called The skull,…。邦訳聖書もこの言葉をカルバリと訳さずその意をとっている。「髑髏といふ処に到りて……」「されこうべと呼ばれている所に着くと……」。

このキリスト磔刑の地はエルサレム市外付近にある刑場とされているが，伝説的には現今の市街地の北西区にある聖墳墓教会内がその位置であるが，磔刑はヘロデ王によって建立された第二の城壁(石垣)といわれるエルサレム市の城壁の外側で行なわれたことは上記引用文及びヨハネ伝福音書第19章

20節「イエスを十字架につけし処は都に近ければ，多くのユダヤこの標を読む」This title then read many of the Jews; for the place where Jesus was crucified was nigh to the city: と全文献の記すところであるが，その城壁が一体どの位置にあったかが不明である。それがためにその位置をめぐって二つの説がある。エルサレムの北側の第二城壁がこの聖墳墓教会の内側にあったとすればこの伝説は正しいが，もし現今の北側のヨッパ門（隅の門）からダマスコ門に至る城壁が第二城壁に相当するものとすると，聖墳墓教会とする説は正しくなく，市の北ダマスカスの門外にあるエレミヤの洞窟の上にある頭蓋骨の形をした高さ約20mの小丘，いわゆる「ゴルドンのゴルゴタ」（ゴルゴタの丘）がそれに相当し，この後者の説は福音書の記述とも符合するのである。



図—1

3. Fife I. ii. 50

東部スコットランドの東海岸に面した州。この名は元来 'forest' の意で農牧畜が盛んであるが，鉱業，造船，織物業なども主たる産業となっていて，その中心地はバックハーベン Buckhaven, カウデンビース Cowdenbeath, ダンファームリン Dunfermline, カーコーディ Kirkaldy の諸都市である。ダンファームリン市はフォース湾 Firth of Forth (一名 Firth of Edinbugh) にかかるイギリス最長，世界で6番目に長いツリ橋 (2.5 k) フォース・ロード・ブリッヂ[注3]を経てエジンバラ市に通ずる。このダンファームリン市はカーネギー Andrew Carnegie (1835–1919) の出身地である。カーコーディ市はアダム・スミス Adam Smith (1723–90) が生まれ，「国富論」を書いた町であり，またカーライル Thomas Carlyle (1975–1881) がしばらく小学校の校長をしていた町でもある。この町はリノリウムの生産で有名で一名「リノリウムの町」とも称される。この町を出てフォース湾に沿ってセント・アンドルーズへの途中次第にひなびた漁村が目立ってくるが，そこにラーゴウ Largo という町がある。ここはデフォー Daniel Defoe (? 1661–1731) が書いた「ロビンソン・クルーソ冒険談」*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (1719) のモデルとされるセルカーク Alexander Selkirk (1676–1721) の出身地である。

このファイフ州の東海岸は多くの行楽地に恵まれ，その中心はセント・アンドルーズ St. Andrews である。この市は聖アンドルー[注4]の葬られている聖地で，それ故にスコットランドの宗教上の中心であり，また彼はゴルフの創始者ともいわれ，この市にあるゴルフ場は世界最古の，しかも最も有名なものでその創設は15世紀といわれ，1754年には王室クラブも出来ている。毎年行なわれる11月30日の「聖アンドルーの日」St. Andrew's Day は宗教的意義よりも競馬やその他スポーツなどが盛んに行なわれる。またここには1411年創立というスコットランド最古の大学があり，この大学を1880年に卒業したディクスン James Dickson は明治13年に来日し，英語・英文学

を教えたがその門下から斎藤秀三郎，岡倉由三郎が輩出した。

ファイフ州は中世の頃の城に恵まれ，また前出のダンファームリンにはエドガ Edgar，アレキサンダー世 Alexander I，ダビィド一世 David I，マルカム四世 Malcolm IV，アレキサンダー三世 Alexander III，ロバート王 King Robert the Bruce などスコットランドの王を埋葬してある Dunfermline Abbey (Abbey Church) がある。また先述のカーコーディ市からラーゴウ市への海岸沿いに西ウィーミズ West Wemyss と東ウィーミズ East Wemyss という町がある。Wemyss という名はこの海岸に無数に見られる洞窟 'weem' ＝cave から出たものである。この両ウィーミズの中間の，海を眺む岩丘の上に 15～17 世紀頃にあったといわれる城が今はまことに巧みに復原されているが，1565 年スコットランド女王メアリはここでその二度目の夫となったダーンリ Lord Henry Stewart Darnley (1545-67)[注5] と初めて会い，二人は五カ月後に結ばれたゆかりの城である。東ウィーミズから少し東にある廃墟は「マクダフの城」Macduff's Castle として知られている。

4. Norway I. ii. 52 省略

5. Cawdor I. ii. 54 北緯 57.32 西経 3.55

スコットランド北東部の沿海州であるネアン州 Nairnshire にあり，その首都ネアン Nairn から南南西に約 10 km，インヴァネス Inverness の北東 18 km に位置し，近郊はウイスキーの蒸溜工場が多い。コーダー城はネアンの市街を臨むコーダー川の右手の岩肌の上に築かれているもので伝説上では 1040 年マクベスがダンカン王を殺害した城の一つになっている。しかしこの城の一番古い部分でさえ 1454 年以後のものとされ，またこれ以前についてのそれらしい証拠もないところからこの伝説は全くの伝説にすぎない。実際に城がその形をなしていったのは 16 世紀から 17 世紀にかけてである。すなわち 1640～80 年にかけて城は修復され，暖炉に刻まれたコーダー家の祝事に関する記録は 1667 となっている。現在はコーダー伯 Earl of Cawdor の

地所である。

劇の上ではダンカン王は反乱軍のマクドナルドを支援したコーダーの領主を死刑に宣し，その死刑執行の有様は次のように語られている。

> That very frankly he confess'd his treasons,
> Implored your highness' pardon and see forth
> A deep repentance: nothing in his life
> Became him like the leaving it; he died
> As one that had been studied in his death
> To throw away the dearest thing he owed,
> As 'twere a careless trifle. (I. iv. 5～10)

> コーダーはまことに素直にその反逆の大罪を認め，
> 陛下のお赦しを請ひ願い，心から深く
> 懺悔の情を示しましたる由。彼の一生を通して
> その辞世の有様，まことに立派なものであったとのこと。
> その死に際して，かねてから期せるもののように
> その代えがたい命をあたかも取るにたらぬもののように
> 無造作に棄て去ったとのこと。

また一方ダンカン王はマクベスの戦勝を賞して，彼に新しい称号を与え，その上彼の居城をも訪問するのである。こういった劇の筋とこの時代の史的背景との関連について成城大学大山俊一博士[注6]は最も新しい見解を発表しておられる。博士の説によるとそれはイギリス全土をゆさぶった大事件，1605年11月5日のガイ・フォークス Guy Fawkes 事件，いわゆる火薬陰謀事件 Gunpowder Plot である。この大事件はカトリック教徒が勢力を得んとして，ガイ・フォークス[注7]，ロバート・ケィッビー Sir Robert Catesby たちカトリック信者の貴族，名門が11月5日の議会開会日に時の国王ジュームズ一世[注8]，王家一族，政府要人を一挙に謀殺しようとしたことが事前に発覚し，全員が逮捕され極刑に処された大事件である。方法はまことに大胆，議会（貴族院）の下に大爆薬を仕掛けることであって，このために先づ議会に隣接する家が借りられ，ここから地下道を掘り，議会の真下に至りここに大火薬をつめ，爆

破するといったものであったが，ただ議会開会当日に参列するカトリックの高僧たちに，いかにしてその参列を止めさせるかという難問にぶつかった。たまたまそれについて開会式に出席しないようにと勧告する一通の匿名の手紙が開会式の2日前にとあるカトリックの信者の貴族の家に投げ込まれた。これが因で事件は発覚し，先ずフォークスが4日につかまり，9日には彼は同志の名を明らかにし，一味は捕えられたが，この事件に連座した貴族にエヴァラード・ディグビー卿 Sir Everard Digby がいる。当時22, 3歳の非常にハンサムで名門の出であった。1603年エリザベス女王の後を襲って即位したばかりのハンサム好みのジェームズ一世はエディンバラからロンドンへの途上，ラットランド Rutland のビーヴァ城に立寄り，ディグビーに士爵を授けている。この彼が Gunpowder Plot に連座して，セント・ポール寺院で1606年1月30日絞首刑とされ，その死体は四分された。当時シェイクスピアはこの処刑を見ていたのかもしれない。「マクベス」劇はこの直後書かれ，しかも1606年ジェームズ一世はシェイクスアピアのこの新作「マクベス」の初上演をみたとされている。上に引用したコーダー領主の処刑の下りはまさにディグビー卿の辞世の有様を伝えたものと思われる。「マクベス」劇には直接出てはいないが，ウオーリック州 Warwickshire にあるカトリック教徒スロックモートン卿 Sir Throckmorton の大邸宅コートン・コート Coughton Court (ストラットフォードから西北に16km 附図参看) はこの陰謀が練られたところであるといわれる。1509年の建造になるこの邸は中心部が石造で，他の部分はその後木造でつけ加えられたものだが，巨大なエルムの樹林にとりかこまれ，内外部ともまことに豪壮で，城の構えを呈してはいるが，この悲劇を知るためか，何かその風情に物悲しさが感ぜられないわけでもない。

6. Saint Colm's inch　I. ii. 63　北緯 56.02　西経 3.18

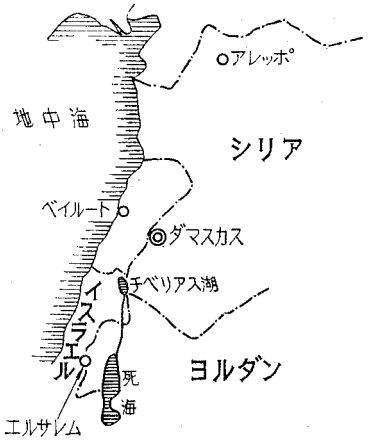
今日のインチコム島 Inchcolm. ファィフ湾の湾内，エジンバラ市の北方，ファイフ州沿岸に近いところに浮かぶ小さな島である。Colmes'-ynch ともいわれた。1123年スコットランド王アレキサンダ一世が難破してこの島に

上陸した際偶々発見された St. Columba[注9] の僧院の墟がある。

劇ではマクドナルド，コーダーの領主と組んだノルウェイ王スウィーノウが降伏するが，その代償としてダンカン王側は一万ドル[注10] の賠償金を要求し，それが得られなければノルウェイ軍の兵士の遺体埋葬をこの島に許さないとするが，これは私の見解では 991 年から 1013 年にかけてデンマーク王スウエンが数回にわたり英国を襲撃した時に，英国側は現金を贈って略奪破壊をまぬかれるのであるが[注11] この史実をシェイクスピアは時代の趨勢から逆に使ったのではないかと思う。

7. **Aleppo** I. iii. 7 北緯 36.14 東経 37.10

Alep とも綴る。アラブ語ではハレブ Halab と称する。古代のベロア Beroea. 地中海の東 130 km の内陸，北シリアの都市でオロンテス川 Orontes とユーフラテス川 Euphrates の谷間，海抜 1220 ft の高地にある。昔からヨーロッパとペルシア，極東との交通の中心であったが，エジプト経由紅海に至る陸上交通路の整備，スエズ運河の開通でその重要性を失した。しかしこの地方で産出する高価な絹織物を中心に依然として木綿，羊毛，金，銀，皮，タバコなどの交易が盛んで一名 'the Chicago of the Middle East' ともいわれている。町は濠に囲まれた古代の citadel (城塞) の他に丸屋根，回教寺院 (モスク)，その尖塔などが並び，東方における美しい都市の一つに数えられている。



図—2

8. **Forres** I. iii. 39 北緯 57.37 西経 3.38

北部スコットランドのモーレイ州 Morayshire にあり，インヴァネス (10 項

参看）の東北東約 40 km，エルジン Elgin (57.39 N 3.20 W) の西南西約 20 km，フアインドホーン川 Findhorn に臨む人口約 4,700 の都市である。シェイクスピアのテキストによっては Foris (Pope版) となっているものもあり，また第一フオリオ版では Soris となっている。Forres はゲエーリック語で 'near water' の意味である。この地方は海流の関係からか西スコットランドの不毛とちがい，スコットランドの最も地味肥沃の地方の一つで 'garden of Moray' と呼ばれる沃野である。西スコットランドで目にする緑の起伏がただの草地であるのとはちがって，この辺りは麦畑の一大起伏である。しかし南部山辺地方に広大なヒースの平野があり，夏ともなれば一眺千里，赤紫のヒースの花の匂う大眺望となる。産業は当然農業，林業に関するもの，すなわち羊毛，オートミル，織物，ウイスキー，化学品などである。特にこの山峡地帯はいわゆる「スコッチ・ウイスキーの里」である。

市の北方クラニイ・ヒル Cluny Hill にはネルソン Horatio Nelson (1758–1805) を記念する碑が 1807 年に建立されている。

またこの地には高さ 23 ft に及ぶイギリス最大の一本石柱 Sweno's Stone がある。これは 11 世紀頃のもので，片面に人間の姿が彫られ，他の片面には古代北欧風のルーン装飾模様のついた十字架が刻まれているが，前者人間像は 1008 年にこの地のマルカム二世 Malcolm II を征したデンマーク王スウエン一世の勝利を記念してのものらしく，一方十字架の彫刻は St. Ninian[注12] あるいは St. Columba (注 9 参看) の弟子の手によって後になって彫られたものと推測されている。

この地フオレスの町の歴史をたどると，ドナルド二世 Donald II がフオレスで殺され，その息子マルカム一世 Malcolm I がその後を継いだが 954 年にこの地のブラヴイ城 Blervie Castle で殺され，更にその子ダフ Duffs が 967 年に殺害され，その死体が川辺に隠されたため，太陽はそれが見付かるまでは昇らなかったという伝説がある。'Gentle Duncan' と称されたダンカン柔和王がここに居城を構えるなどフオレスは多くのスコットランド王と由緒ある城があったとされ，特にそれは 1040 年にここでダンカン王はマクベスに

殺害されたと信ぜられているものの一つである。

マクベス，バンクオウの両将軍がノルウェイの大軍が援護する反乱軍を撃ってフオレス城に向う凱旋の途上に三人の魔女に出遭うのは実にこの辺りに広がるヒースの大原野の中であろうが，フオレスの町を有名にしているのはシェイクスピアというよりはむしろこういった魔女たちなのである。

あのスコットランド嫌いのジョンソン大博士[注13]が1773年にスコットランド周遊旅行に出て，ここを通りかかった折に（8月26日 木曜日）ジョンソンは「マクベス」の魔女のことを思い出し「しかし，われわれは王様にして貰う約束に出会わさなかった」[注14]と述べていることは別にしても，この町はその昔国王ダフが西方諸島（ヘブリディーズ諸島のこと。1項参看）を征伐した時，王の居城のあったこのフオレスの町の魔女たちはその島の住民に同情して王ダフを病気にしたと伝えられているなど魔女との因縁は極めて深い。

しかし何にもましてそれはジェームズ一世との関係である。魔女なるものはどこの国においても信ぜられているものではあり，特にスコットランドの気候風土からか，スコットランドでは魔女の伝説が多いのであるが，このいわゆる魔女なるものがキリスト教国のみにおいて魔女＝宗教異端者という等式が成立ち，おおよそ本来の魔女とは全くちがった魔女を裁く——魔女狩りなるものが風靡したのである。魔女狩りはヨーロッパ大陸に比してイングランドでは大したことはなかったが，スコットランドはヨーロッパと同じように盛んで，その拷問，処刑の方法も無惨なもので，多くは生きながらの火刑が普通であった。後にジェームズ一世となったスコットランド王ジェームズ六世は最も魔女狩りに熱心で，1590年から92年にかけては自ら主宰して魔女裁判を行ない，また「悪魔論」 *Dœmonologie, in Forme of a Dialogue* (1597) を著わすなど魔女狩り王の名を成したほどであるが，フオレスの町にはその頃魔女とされたものたちを焚刑にしたという「魔女の石」Witches' Stone が残されている。それには次のような文面の掲示がある。

From County-Hill witches were rolled in stout barrels through which spikes were driven. Where the barrels stopped they were

burned with their mangled contents. This stone marks the site of one such burning.

9. Glamis　I. iii. 71　北緯 56.37　西経 3.01

スコットランド南東岸のアンガス州 Angus, テエイ湾 Firth of Tay に面するダンディ市 Dundee の北約 13 km, フォファ Forfar の町の南西 8 km にある町である。Glamis の名はゲェーリック語の glamhus すなわち 'a wide gap'＝a vale の意である。グラーミス城はモータウエイ 94 のバイパス沿いにあり，ストラスモア Strathmore の森林を前にし，城壁からは遠くグランピア連山 Grampians を望み，スコットランドで最も美しく優雅な——フランス式シャトウの趣をそなえた名城で，1675～87 年に現在のその容姿をそなえたものである。現在はストラスモア伯 Earl of Strathmore の居城である。またこの城はエリザベス女王の母君 Queen Elizabeth the Queen Mother の成長されたところであり，且つ 1930 年マーガレット王女 Princess Margaret, Countess of Snowdon——14 代ストラスモア伯の孫娘——が生まれたところでもある。伝説によると——シェイクスピアの「マクベス」のではなく——ダンカン王がマクベスによって殺された城となっていて，城の内に Duncan's Room というのがあるが，やはりシェイクスピアの悲劇とは直接の関係はないという。またこの城は 1034 年のマルカム二世暗殺の場ともいわれるが，このグラーミスの町のマルカム王の墓所というところには王を処刑した時の道具 'jougs' がかかっている。

サー・ウオルター・スコット Sir Walter Scott は 20 歳の頃この地を訪れた一夜の経験を *Letters on Demonology and Witchcraft* として発表している。

10. Inverness　I. iv. 42　北緯 57.27　西経 4.15

インヴァネスの名はわれわれには，今は見られないが明治初期に入った，いわゆる二重廻し，トンビなどの別名のある二重マントのことで知られているが，これはこの地方で着用されていたことからその名が出たとする説がある。

スコットランド北東岸の北海の入口モーレイ湾の奥，ビューリ湾 Beauly Firth とモーレイ湾とが結ぶネス河 R. Ness の河口にあるインヴァネス州の首都。ここからネス河，ネス湖 Loch Ness など数々の細長く，紺碧の，時にはクロームグリーンの，また時にはモノクローム・チント・クールの色の湖や川をつなぎ，美しいが単調な景色のつづく道を進み，フォート・オーガスタス Fort Augustus の町を，そして左手にスカンジナビア半島のつづきと考えられているカレドニア山系のグランピア山脈に属する，これブリテン島第一の高峯ベン・ネビス Ben Nevis (1,322 m) の異様な山容が，ハイランド Highlands の関門，その名の通りウイリアム三世[注15]がハイランド氏族を圧するために築いた要塞のあるフォート・ウイリアム Fort William に迫るリンネ湾 Loch Linnhe を経て西海岸に達する水路は全長 97 km，1847 年開通のカレドニア運河 Caledonian Canal と呼ばれ，今日では観光ルートでもある。

このようにインヴァネスは陸上，海上交通の中心であり，また商工業の中心でもあって，一名 'the Capital of the Highlands' と呼ばれ，また周囲の風物と街の建物の美しさ，特に夏は白夜 (ハクヤ) をたのしむ観光のメッカである。ここは 3 世紀頃からピクト族の占めるところで主要な要塞の地であった。565 年に St. Columba はピクト王ブルード Brude をキリスト教に改宗させるためにこの地に入ったといわれている。

ネス河を見下ろすオールト・カースルヒル Auld Castlehill (auld＝old) というところにはシェイクスピアがマクベスの居城とし，ダンカン王を殺したという木造の城が昔はあったが，ダンカン王の息子マルカム三世 Malcolm Canmore (r. 1058–1093) が 1057 年に父の仇マクベスを討った時にこの城を壊わしたとされている。マルカムの息子ダビッド David I が丘の別のところ，現在の Castle Hill に新しい城を 1140 年頃築いたが，これは 1307 年にロバート・ブルース Robert Bruce I[注16]により壊わされた。クロンウエル Oliver Cromwell (1599–1658) はネス河の河口にフォートを築いたが，これも失く，現在は城門をかねた立派な吊り橋のかかるネス河に臨む Castle Hill に 1835 年建造された赤い石造りの Castle Wynd が市の公舎として使われている。

またこのインヴァネスの市内にはダンカン王の遺骸をアイオナ(次項参看)に運び，埋葬するための一行が休んだと土地の伝説が語る「ダンカンの井戸」Duncan's Well がある。

11. Colmekill II. iv. 33

ニコラス・ロウ Nicholas Rowe の版は Colmeshill とし，Dr. Johnson 版は Colmeskill となっている。「内ヘブリディーズ」のなかの一つの島で，マル島 Mull から西へ約 1.6 km，アイオナの瀬戸 Iona Sound を距てたところにある，長さ約 6 km，幅約 3 km の卵形の島で，現在のアイオナ島 Iana のことである。もとはただ 'Ia' または 'Hy' と称されていたのが 'Ioua Insula' から Iona に誤記されたとされる。563 年に St. Columba (注 9 参看) が，何の理由からか不明であるが，12 人の使徒と共にここに上陸して修道院を建てたが，これは 9 世紀にデーン人の侵攻で焼失した。11 世紀にスコットランド王マルカム・ケンモア (10 項インヴァネス参看) の妃 Queen Margaret により再建され，この近くの St. Oran's Chapel には 48 人のスコットランド王 (その最後はダンカン王という説とマクベスという説がある)，8 人のノルウエイ王，4 人のアイルランド王，2 人のフランス王が埋葬されているという。以上のことからここは巡礼の主要な聖地となったため，後には I-colm-kill または I-Chaluin-Chille 即ち 'the island of Columba of the church' と呼ばれた。英文学史上では他にスコットが 1810 年にこの島を荒涼として人住まぬ物悲しいと描き，キーツは 1818 年にここを訪れ，またワーズワースは 1835 年にこの島について 3 つのソネットを歌っているが，この島について最も記憶されるのは，ジョンソン大博士の言葉であるといわれる。「マラソンの野に立って愛国心を高められず，またアイオナの旧跡の中に立って信仰心の厚きを覚えない人は，羨むに足らない」と[注17]。1773 年 10 月 20 日　水曜日のことである。

12. Scone II. IV. 35

パース Perth (59.15 N 2.52 W) 市の北約 3 km。かつてピクト王国 Pictish

Kingdom の首都であったと想定される古都でブレエイマア道路 Braemar Road にある。現在の Scone は Old Scone の東，パースの北東約 3 km のアバーディーン道路 Aberdeen Road にある。Old Scone は古くからスコットランド国王の居城のあったところで，それは Scone Palace と呼ばれ，ティ川 R. Tay の左手の丘にあったが，ジョン・ノックス[注18]により 1559 年に壊された。この宮殿で 13 世紀頃までスコットランド王は戴冠式を行なっていて，それに使われていた石が，いわゆる 'the Stone of Scone' 別名 'the Stone of Destiny' であったが，それは 1296 年にエドワード一世 (注 16 参看) がスコットランド征服の記念としてウェストミンスター寺院 Westminster Abbey に運び込み，爾来イギリス国王の戴冠式に用いる即位の椅子 Coronation Chair (別名 the Chair of St. Edward) の下に置かれているが，1950 年にこの石が盗まれて大騒ぎになったが，幸いすぐ発見されて，もとの場所に収められた。

この石についてはいろいろの伝統があって，長さ 26 インチ，幅 16 インチ，厚さ 11 インチのこの石はヤコブ Jacob[注19] が Bethel と命名した土地で夢をみた (Jacob's Ladder) 時に枕にしていた石 (Jacob's Pillow) という伝説があり，これが紀元前 5 世紀にアイルランドに，更に後にスコットランドに運ばれたとされる。9 世紀頃ギャロウエィ Galloway 地方 (現在のカクーブリ州 Kirkcudbrightshire とウイグタン州 Wigtownshire の一帯) にいて王と信奉されていたケニス・マッカルパイン Kenneth I Macalpine がダンスタフンジ Dunstaffnage というところからこの石を Scone に運んだといわれる。

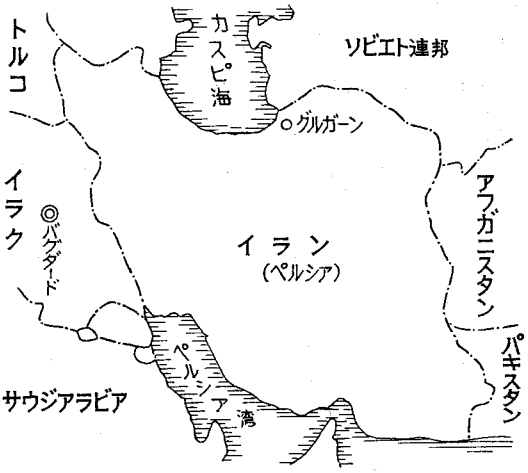
またこの石については昔次のような予言が伝えられていたが，その予言はスコットランド王 James VI (注 8 参看) が 1603 年にエリザベス一世の後を継いで英国王に即位するに及んで実現された。

If Fates go right, where'er this stone is found, The Scots shall monarches of that realm be crowned.

13.	**England**	II. iv.	137	省略
14.	**Ireland**	II. iv.	138	省略
15.	**Russian**	III. iv.	99	省略

16. Hyrcan　III. iv. 100

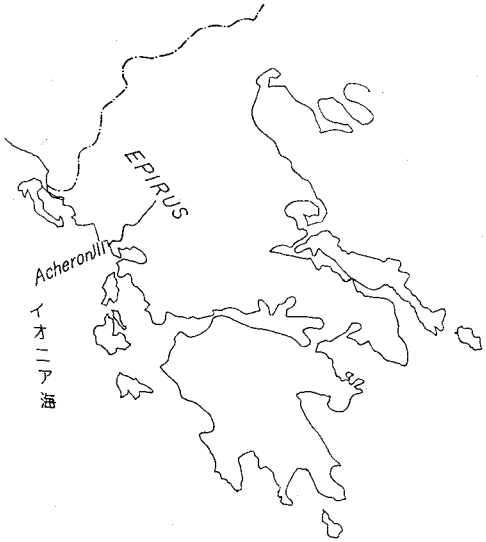
Hyrcania. 古代ペルシアでは Virkana すなわち 'wolf's land' と呼ばれた地方だが，漠然と広く，判然としない地帯である。カスピ海の南一帯，つまり現今のグルガーン Gorgan とマザンダラン Mazandaran 一帯を指したらしく，そのためカスピ海は昔，時には Hyrcanian Sea とも呼ばれた。



図—3

17. Acheron　III. v. 15

語原不詳であるが，ギリシヤ神話によると 'river of woe' で，地中海に注ぐいくつかの河に当てられるが，特に陰府の王ハデス Hades と何か因縁があるとされている故に，すべてラテン語では広く 'lower world' を指す。現代ではイオニア海 the Ionian Sea に注ぐギリシヤのエピラス Epirus にある小さな川テスポロティア川 Thesprotia を指すものとされている。



図—4

18. **Birnam**[注20] IV. i. 93 北緯 56.33 西経 3.35

パースからモータウェイ 9 を約 25 km 北上するところにダンケルト Dunkeldという静かな町がある。ここは 'fort of the Celts' といわれ，これは 815 年にアイオナ (11 項参看) からきたケルトの僧のためと，St. Columba (6 項及び注 9 参看) の聖遺物 (形見) を納めるための寺院が建てられたことによるものである。ここから南に広がる高さ 1324 ft の丘が Birnam Hill である。世塵から全く離れた，まことに静かなところで，夏の絶好の保養地である。

19. **Dunsinane** IV. i. 93

パースからモータウェイ 94 を北東に上って New Scone (12 項参看) を過ぎ，約 10 km のところにバルベギイ Balbeggie の町がある。その右手にサイドロー・ヒル Sidlow Hills の展望をたのしむことが出来るが，この南西端にのびるところがダンシネインの丘 Dunsinane Hill (1012 ft) である。ここにはマクベスの城と称される民族的古墳が残っているだけである。バーナムとの距離は約 20 km である。

20. **Scotland** IV. iii. 7 省略

21. **Arabia** V. i. 49 省略

参考書 この文を章するに当ってはその性質上多くの辞典，歴史書，地図，聖書，シェイクスピアのテキスト，現地で入手したパンフレットの類を参照としたが，煩雑をさけてその主なものにとどめる。

Encyclopaedia Britanica
Everyman's Encyclopaedia
The World Book Encyclopedia
The American Peoples Encyclopedia
The Oxford English Dictionary
S. Johnson: A Dictionary of the English Language, Georg Olms, 1968
W. W. Skeat: Etymological Dictionary of the English Language,

Oxford, 1953
Kenneth Cameron: English Place Names, R. T. Batsford, LTD., London, 1961
L. Russel Muirhead: Scotland, Ernest Benn LTD., London, 1967
The Concise Dictionary of National Biography, Oxford, 1969
F. G. Stokes: A Dictionary of the Characters and Proper Names in the Works of Shakespeare, Dover Publications, Inc., New York, 1970
A. E. Baker: A Shakespeare Commentary, Frederick Ungar Publishing Co., New York, 1964
キリスト教大事典　教文館　昭38年
聖書大辞典　新教出版社　昭28年
Novum Testamentum Graece
Nouum Testamentum Latine

(昭46.5.20受理)

-注-

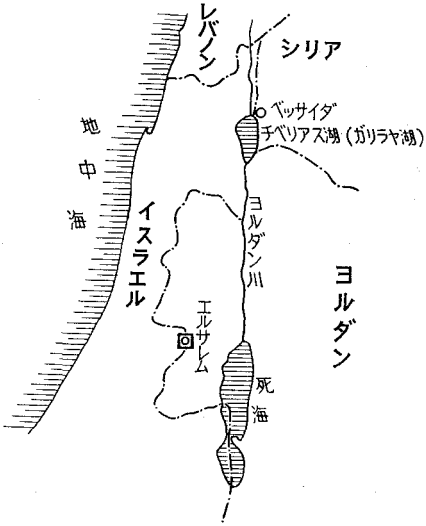
1　スコットランドのニシン漁が初めて記録に現われたのは1153年で，アイルランドでは1202年ジョン王 (r. 1199-1216. 大憲章 Magna Charta に署名した王) がコンナル Connal という僧院に対してニシンの寄進を受けることを認めたという記録が最も古い。宗教的戒律のきびしいヨーロッパではこのニシンは精進料理として，またイギリスでは諸種の税，献金，地代として用いられた。歴代の王はこのニシンばかりでなく，その出港，塩蔵，燻製などの加工物にも，更にニシン場に開かれる居酒屋，宿屋にもすべて税金をかけた程ニシンはイギリスの国の富と隆昌に重大な影響を与えた。それ故にこのニシン業を守るためにも海軍の力は必要であった。世界最強のイギリス海軍はこのニシンによって築かれたとさえ言えるのである (福田伴美「にしんとイギリス」あるびよん No. 16 昭和27年あるびよん・くらぶ)。このようにイギリスに昔から深い関係のあるニシンは一方服地の面にもあらわれて，一時わが国で流行した杉綾の模様⋘⋘の服地はニシンの骨に似たところからヘリンボーン Herringbone と称されるもので，この模様の織物はニシンのよく獲れるスコットランドから出たものである。

2　メンデルスゾーン Jacob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847) はイギリスで好意をもたれたドイツの作曲家で，1829年と1832年の二度渡英している。彼にはイ短調の「スコットランド」*Schottische* という交響曲があるが，これも第一回の渡英の折スコットランドに旅し，エデインバラの旧王城ホリルード Holyrood Palace (1500年ジェームズ四世の建てたもの。スコットランド女王メアリが6年間君臨したところ) を訪れ，その古い礼拝堂のなかで楽想を得たものといわれ，スコットランドの民謡と舞曲が織

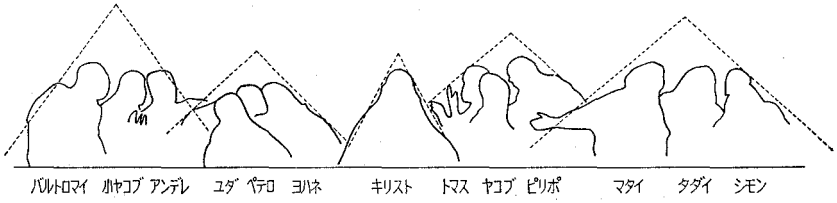
り込まれた中世紀の夢幻的物語と古城の風景とを描いた名曲である。

3 この橋 Forth Road Bridge はスコット卿 Sir Gilbert Scott を主査にして，1958年に着工され，1964年に竣工したもの。この橋と並行してフォース・レイルウェイ・ブリッヂ Forth Railway Bridge がかかっているが，これは世界の七不思議の一つに数えられたものである。それはその当時 (1882–90) としては未曾有の大工事で，この種の橋で1917年にカナダのセント・ローレンス川 St. Lawrence R. に架設されたケベック橋 Quebeck B. が再度も失敗していることからも推測されえよう。工事はファウラ Sir John Fowler (1817–98) がベーカ Sir Benjamin Baker (1840–1907) の補佐でなされ，全長約 2.4 k，使用剛材 38,000 t といわれる。この橋のタイプは控架橋または肘木橋 (ゲルバートラス橋) と称されるもので，二つの最大支間は 1,710 t (521 m) である。ケベック橋が出来るまでは世界最長大の橋であった。

4 聖アンドルー St. Andrew はシモン・ペテロ Simon Peter の兄弟。ガリラヤのベッサイダの出で，12 使徒の 1 人でアンデレと称される。「[40]ヨハネより聞きてイエスに従いし2人のうち1人は，シモン・ペテロの兄弟アンデレなり」「[44]ピリポはアンデレとペテロとの町なるベッサイダの人なり」(ヨハネ伝福音書第 1 章 40 節，44 節)。彼はキリストの最後の晩餐に兄のペテロと一緒に列席している。最後の晩餐の場は中世以来多くの画家の描くところであるが，レオナルド・ダ・ヴィンチ Leonard da Vinci (1452–1519) の描いた「最後の晩餐」ほど劇的にキリストや弟子たちの深い心の動きを伝えるものはないであろう (多くはレオナルドのものに似ているが，ノナントーラ Nonantola (北イタリア．44.41 N 11.03 E) の修道院図書館所蔵のエミーリア派の手になる「最後の晩餐」はレオナルドのとは正反対の直線的，シンメトリーの単純的構成で人物も画一的である) が，このレオナルドの画で



図—5



いえばアンデレは向って左の6人中にいて，レオナルドの得意とする構成の二等辺三角形の一斜辺に位置している。

アンデレがキリストの最後に立会っているかどうかは不明であるが，彼自身も伝説によればアカヤ（現在のギリシャ一帯）のパトラ（Patræ）で磔刑に処せられたが十字架上に2日間生命を保ち，道行く人に観行をなしたという。遺骨はスコットランドに運ばれて葬られたところが今日のセント・アンドルー市であるといわれる。以来スコットランドの守護聖となるばかりでなく，その遺徳は次のようなものに偲ばれている。

(1) The Order of the Thistle（アザミ勲章）は彼を記念するもので，787年に早くも設けられたというが，ジェームズ五世が1540年に制定し，その後数回改訂されたという。これは英国の王族以外は僅か16人のスコットランド貴族が叙せられる The Order of the Garter に次ぐ勲章である。

(2) St. Andrew's Cross. 彼が最後をとげた十字架をかたどる聖旗で，青地にX形の白十字をあらわす。

(3) 上記(2)の青地にX形の白十字が，イングランドの守護聖，聖ジョージの十字（白地に赤十字）とアイルランドの守護聖，聖パトリックの十字（白地に赤のX形十字）とに組合されて，イギリス国旗として1801年1月に公布された。

(4) St. Andrew's Day (330頁参看)。

(5) St. Andrew's Night. St. Andew's Day の前夜11月29日の夜で，この聖者は未婚婦人の守護でもあったことから，この夜，聖者に祈ると未来の夫の姿が見れるという民間信仰がある。

5 夫フランソア二世が没したためスコットランド女王メアリは幼時から暮していたフランスから1562年に帰国し，カトリック教徒の従弟にあたるダーンリと結婚した。ダーンリは性質愚鈍，放縦で勝手な男であって，メアリの新教徒貴族に対する賢明な政策を失わしめるなど，彼女の立場を悪くするだけであった。二人の間に一子ジェームズ（スコットランド王ジェームズ六世，イングランド王ジェームズ一世のこと）が生まれたが，二人の仲は冷却するばかりでなく，メアリの指図でダーンリを殺したといわれるボズウエル James Hepburn Bothwell 伯と結婚した。これは一人メアリの運命を変えた（エリザベス女王によって1587年処刑された）ばかりでなく，イギリスの国内外に争乱をもたらした。

6 「マクベス」 旺文社 昭和43年。

7 ガイ・フォークス (1570–1606)。彼が中心となって企てられた Gunpowder Plot の未遂事件を記念するため，議会は当日を A holiday forever in thankfulness to God for our deliverance として翌年から公休日となり，毎年11月5日に Guy Fawkes' Day が行なわれる。この日が近づくと子供達は Fawkes を模した等身大の人形を作り，また子供達も自ら仮面をかぶって次の歌をうたって市中をねり歩く。

Remember, remember,
The fifth of November,

Gunpowder treason and plot,
I see no reason
Why gunpowder treason
Should ever be forgot!
Guy Fawkes, Guy,
Stick him in the eye,
Put him up a chimney,
And there let him die.

そうしてどこにでも見られるように子供達は戸毎に小遣銭を貰い，花火をあげたり，かがり火を焚いたり，最後はそのたき火でその人形を焼く。以来このGuyはイギリスでは「物笑いの種になるような人」の意が生じ，またアメリカへの移民と共にこの祭りが伝わって，アメリカでは「男」「やつ」の意となっている。(但し，女性にも使われる例があると報ぜられている。大塚高信「語法の調べ方」Guyの項参看。研究社)

8 前述(注5)のようにスコットランド王メアリとダーンリの間に出来た一子で，またヘンリ七世の女マーガレット＝テューダの曾孫に当るスコットランド王ジェームズ六世 James VI of Scotland。36歳の時にエリザベス女王の後を継いでイングランド王となり，ジェームズ一世となる。王権神授説を唱えて物議をかもした。ハンサムな人物を好み，その任を容貌で決めるなどのために世間の不評を買ったが，偶々有為な人物も登用した。フランシス・ベーコン Prancis Bacon (1561–1626) はその一人であった。天性議論好きで，何事にも一家言をもったジェームズ一世は前述(8項)のように「悪魔論」を著わしたり，32歳の時には「帝王道」(Basilicon Doron) を，更に「自由なる王国の真の法，すなわち自由なる王と臣民の間における相互義務」(True Law of Free Monarchies or the Mutual Duty betwixt a free King and his Subjects) なる政治論文を著わしている。尚「欽定訳聖書」(The Authorized Version of the Bible) はジェームズ一世の勅命でなされたことは衆知のことである。

9 St. Columcille, あるいは St. Columbanus とも綴られる。521年アイルランドのダァニイゴール Danegal 州のガータン Gartan 湖の近くで生まれ，ダブリン Dublin の近くに隠遁，デリ Derry などの地に教会を建てた。563年にスコットランドに渡り，アイオナに修道院を建て，ピクト族の改宗に当る。565年にはインヴァネスにも行っているといわれる (10項参看)。彼は再び生地を訪れることはなかったともいわれるが，一説には575年と585年に訪れたともいわれる。597年に没したがその地は不明。

10 ドルの起りは1519年ボヘミア Bohemia の Joachimsthal というところで採掘された銀を鋳造したに始まる。一方「マクベス」はマクベスがダンカンを殺した1040年が中心的時代であるから，この一万ドルというのはシェイクスピアのアナクロニズムである。

11 980年以降再びデーン人の侵入が始まり，990年にも組織的侵攻があった。アングロ・サクソンのエセルレド二世 Ethelred II はこれを防ぐにも武力では対抗出来ないので，

金で平和を購わんとした。991年から1012年まで,4回にわたって総計11万8千パウンドを正貨で支払ったが，これはその都度人民の負担に課せられた。これが史上重要なデーンゲルド Danegeld 地租なのである。

12 生没年不明 (C. 360–C. 432)。St. Ninias とも綴られる。また St. Ringan ともいわれる。ソルウェイ湾 Solway Firth で生まれたとされる。ローマに巡礼し，そこで修行し，その帰途ウィットホーン Whithorn に教会を建てた (397年)。その壁が白かったことから 'White house of St. Ninian' と呼ばれたが，これはスコットランドで初めての石造りの漆喰仕上げの教会であった。この教会は爾来多くの巡礼者の訪れるところとなり，その中には，ロバート・ブルース (10項及び注16参看)，ジェームズ三世，四世，特に五世は毎年この教会に巡礼したとのことである。

13 ジョンソン Samuel Johnson (1709–84) はフランスアカデミーがその国語辞典を作るのに40人の編集員を動員して40年もかかったということを馬鹿にして，自分は1人で1,600人分を3年でやるのだと豪語して，とうとう1755年に The Dictionary of the English Language という辞書を編したが，その中の 'Oats' の定義に「イングランドでは馬の食物だが，スコットランドでは人間の食物」A grain which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people. を与えたことなどから，彼がスコットランド嫌いであったといわれているが，彼はこの辞書を編するのに6人の弟子を使ったが，その5人まではスコットランド人であって，その上ジョンソンは彼等の面倒をよくみたといわれている。(福原麟太郎，学鐙 Vol-64 No. 9)

14 "At Fores we found good accommodation, but nothing worthy of particular remark, and next morning entered upon the road, on which *Macbeth* heard the fatal prediction; but we travelled on not interrupted by promises of kingdoms,…" (Samuel Johnson, A Journey to the Western Islands of Scotland, Printed for W. Strahan; and T. Cadell in the Strand, London, 1775, p. 51)

15 オレンヂ公ウイリアム三世。1689年にメアリ女王と共にイギリスの共同統治者となる。王位をめぐって血を見ることなしに成就した革命ゆえに名誉革命といわれた。

16 エドワード一世はヘンリ三世の後を継いで1272年に即位し，三人のエドワード王のはじめをなすが，このエドワード一世の35年間の治世は，外国の分子，勢力が一掃されて，完全なイギリス的となるのである。彼は立法・司法の面に尽力したばかりでなく，ウェールズ，スコットランドも征服し，イギリスの統一をなした。1296年スコットランドに兵を進め，この地を征服し，自らスコットランド王ともなった。この時である。スコットランドで神聖なる伝統を持っている 'the Stone of Scone' をウェストミンスターに持ち帰ったのは。エドワードのスコットランド征服は逆にスコットランド人に強い反抗を引き起こし，ウィリアム・ウォレス William Wallace はその秀れた指導者であったが，捕えられて1305年ロンドンで処刑された後に，ウォレスに代ったのがロバート・ブルースである。彼は自ら王となり，強い反抗を示した。エドワード一世は1307年スコットランド遠征中に死し，その後継者エドワード二世が1314年にバノックバーン Bannockburn で大

敗を喫した。ブルースの死後はその子ダヴィド David 二世がスコットランド王となったが，1371年に死んだ。代々宮宰の地位にあったウォールタ・スチュアート家はその6代目がスコットランド王ロバート一世の娘と結婚し，その一子，即ちダウィット二世の甥のロバートが，ロバート二世として立ち，スコットランドのスチュアート朝が始まるが，この時からスコットランドはイングランド王に忠誠を誓わず，完全な独立国となる。尚スチュアートの名は宮宰 Steward に由来するが，このスチュアート王朝の男系はジェームズ五世で絶え，娘のメアリ・スチュアートが後を継いでスコットランドの女王となったが，この時から Stuart の綴りが用いられるようになった。

17 "That man is little to be envied, whose patriotism would not gain force upon the plain of *Marathon*, or whose piety would not grow warmer among the ruins of *Iona*?" (Samuel Johnson, *op. cit.* p. 347)

18 John Knox (1505–1572) スコットランドの宗教改革家，政治家，歴史家。1522年グラスゴー大学の出身といわれる。1547年から宗教改革に身を投じ，同年セント・アンドルーズ城に立てこもり，その落城後フランス軍艦に捕われ，フランスに送られたが，1549年に釈放された。1554年にヂュネーブでカルヴィン Jean Calvin (1509–1564) にあって強い影響をうけた。1559年に帰国し，翌年カルヴィニズムにもとづく 'Treatise on Predestination' を作成し，長老派教会の確立に成功した。1561年フランスから帰国したメアリ・スチュアートに，初めて会って，女王のカトリック傾向を遠慮なく批判し，カトリック派と闘争をつづけたが，メアリの死後は余り振わなかった。1572年エディンバラで熱烈な説教ののち没した。

19 ヤコブの出生は創生記に次のように記されている。「[24]かくて臨月みちて見しに胎には雙ありき，[25]先に出たる者は赤くして躰中褒の如し其名をエサウと名けたり，[26]其後に弟出たるが其手にエサウの踵を持り其名をヤコブとなづけたりリベカが彼等を生し時イサクは六十歳なりき」(第25章)。ヤコブの名はこのように「踵をつかむ」者の意であるが，「神守り給う」の意も合せ持つといわれる。このいわれ，その波瀾重畳の生涯は創生記に詳しい。偽計で兄から相続権と父の祝福をも奪ってハランに逃げる途中，ベテルで天に通ずる梯子を夢の中にみて，彼は神が自分を守ってくれると確信したといわれる。

20 Birnam の綴りは第4フォリオでは Birnam と一定であるが，F_1 では Byrnam (IV. i. 93), Byrnan (IV. i. 98, V. ii. 5), Byrnane (V. iii. 2, V. v. 34, 44), Birnane (V. iii. 60, V. iv. 3) とまちまちである。F_2 では Byrnam (IV. i. 93, V. iii. 2, V iv. 3, V. v. 34, 44), Byrnan (V. ii. 5)。F_3 は Byrnam (IV. i. 93, V. v. 34, 44), Birnam (V. ii. 5, V. iii. 2, V. iv. 3)。